別紙様式３

平成３０年度　【　学園研究費助成金＜ Ｂ ＞　】研究成果報告書

学部名　国際コミュニケーション学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　フジオカアユミ
氏　名　藤岡阿由未

研究期間　平成３０年度

研究課題名　ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ共同プロジェクト「ブルームズベリ・グループと郡虎彦―詩人ヘスター・セインツベリとの書簡をめぐる日英演劇の異文化接触」

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者			
研究分担者			
研究分担者			

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

本研究は、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイの「アジア演劇舞踊センター」と共同プロジェクトの第一段階と位置付けられる。近代の重要な劇作家の一人、郡虎彦の英国での活動については、これまでほとんど評価されていない。ここでは特に、郡が英国の芸術家との交流において重要な役割を担った詩人で恋人のヘスター・セインツベリとの書簡を軸に、日英演劇の接点をとらえ直すことを目的としている。郡ら日本人芸術家から英国のモダニスト芸術家集団ブルームズベリ・グループへ与えた影響のみならず、郡の書いた劇が英国演劇でどう受容されたかなど検討すべき点は多岐にわたるが、以上の背景をもとに本プロジェクトでは、セインツベリとの書簡を通して郡の英国での活動の多様な関係性の評価を試みる。

２．研究方法等（300 字程度で記述）

今年度の研究内容は、ロイヤル・ホロウェイのマーク・コーエン教授を中心とするアジア演劇、英国近代演劇の研究者と互いに知識を共有する機会を持つことである。全体では数年にわたるプロジェクトだが、今年度は、２回セミナーを行い、基本的な知識を共有し、意見交換する場を設けている。そのうえで、郡とセインツベリの書簡・作品展示および関連イベント企画（書簡・作品を所持するセインツベリの家族の承認済）に向けて協議する。
スケジュール：2018 年 12 月（済）セミナー共同開催、2019 年 3 月（決定）セミナー共同開催（いずれもロイヤル・ホロウェイにて）、2020 年 2 月　セミナー共同開催（仮）、
2021 年 10 月（仮）　国際カンファレンス実施、書簡・作品展示および関連イベント実施（ロンドン）

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

本研究は、ロイヤル・ホロウェイの演劇研究者との合同研究の第一段階と位置付け、セミナー'Migration of Voices: Japanese Modernist Playwright Torahiko Kori in London'を開催し、近代演劇の接触点やモダニズム運動における彼らの位置づけなど、基本的な知識を共有し意見交換を行った。またこの続編 2019 年 3 月には 'Love, Taboo and Obsession: Torahiko Kori's Experimental Noh Play within a Framework of Western Drama'と題し郡虎彦のドラマツルギーについての理解を深める内容のセミナーの共同開催も控えている。このような共同研究を重ねたうえで、2020 年度には研究者のための国際カンファレンス実施および一般の参加をも見込んだ「書簡・作品展示会および関連イベント」実施を目標としている。ここでは書簡の展示に加え、セインツベリの家族の一人、ロザリンド・ワイアット（アーティスト）による郡とセインツベリの書簡をテーマとした美術作品の展示も行う予定である。多様な芸術的ムーブメントをけん引したブルームズベリ・グループへの英国での一般的な関心の高さからすると、今回のプロジェクトを研究者の間のみにとどめず一般へ開く方法が妥当だと考えられるため、研究成果の社会へのさまざまなのアプローチを今後は予定している。

４．キーワード（本研究のキーワードを１以上８以内で記載）

①近代演劇	②文化接触	③モダニズム	④ブルームズベリグループ
⑤	⑥	⑦	⑧

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

従来の研究ではおもに芸術家の仕事が個別に検討され、芸術家同士の関係性そのものに焦点をあてる機会は多くない。本プロジェクトでは郡虎彦の作品そのものの研究ではなく、他の芸術家との関係、およびその背景にある文化接触に着目する。本研究で英国における日本演劇の受容についての考察が加わることにより、将来的には日英演劇の異文化接触の包括的な検討が可能になるだろう。